モラロジーの基本的思惟方法

―モラロジーの論理的前提解明の試み―

麗沢大学助教授
黒　川　　洋

1. 「心のたてかえによる現実問題解決」の思惟方法
2. 「普遍性と超越」の思惟方法
3. 「調和とバランス」の思惟方法
4. 「道徳による進化」の思惟方法
5. 「システム的」思惟方法
6. む す び

1. 「心のたてかえによる現実問題解決」の思惟方法(注1)

1.1 広池千九郎博士の取り組んだ「時代の根本問題」

「最初の試みとしてのモラロジー」の創建者広池千九郎博士（1866―1938）が畢生(ひつせい)の努力で取り組んだ「時代の根本問題」は、人間精神の退廃を自律的に克服させることを通じて人類をその不安と対立・抗争・混乱の中から根本的に救い出すことにあった。

当時は人類が未だかつて経験したこともない一大激動期に突入しはじめた

時期であり、特に明治・大正および昭和初期にかけて和魂洋才冨国強兵を旗印に急速に西欧化していった日本にあって、「時代の根本問題」が鋭く広池千九郎博士によって感じとられたのである。

即ち、人知が進めば進むほど、世の中が便利になればなるほど、一方において人類社会の不安と対立・抗争・混乱・解体が加速化される現実に直面した広池千九郎博士は、現代社会・現代文明を形成している基本原理そのものの中に重大な根本的な欠陥を感じとったのである。——13、4世紀以来ヨーロッパにほうはいとして興ってきたルネッサンス運動の思想である自由・平等・博愛の思想は、一面において暗うつなヨーロッパの社会体制を一変して明朗清新ならしめたが、他面、現代の利己主義的・虚無主義的諸傾向(注2)を助長し、人類を重大な不安・混乱・破滅の危機におとしいれる根本原因をなしている、と広池博士は歴史を洞徹した眼でとらえたのである(1)。

そしてこの現代社会混乱の根本原因の構造を、つぎの文章に見られるように分析し、その究極の原因を人間精神の退廃、利己主義においてとらえたのである。(2)(注3)

01 人間の自己保存の本能は、絶えず其境域を超えて利己的本能に進み居るものなれば、すべての人間は、皆此聖人の教を不便として、其聖人正統の教育範囲より逃れ出でむとするのであります。(中略)斯(カ)う云ふやうに、聖人は斯かる人間の利己心に迎合する事をば許さざりしも総(ス)べての人間は次第に堕落(ダラク)してヂャーナリズム(Journalism)に為り、天下の木鐸(モクタク)(Leader)を以て任ぜねばならぬ所の学者、政治家、教育家、宗教家幷に上流社会の人々が、先づ聖人の教説を利己的に曲用するに至つた結果、遂に聖人正統の教へに反対する所の今日の異端の学問、智識、思想、道徳及び信仰を生ずるやうに為ったのであります。而して、其基礎の上に、今日の政治、法律、経済、産業、教育、宗教、芸術、娯楽機関等あらゆる人間の精神的及び物質的生活の方法が組織されたのでありますから、其社会組織の根本原理が既に誤つて居つて、何れの方面にも皆道徳上の大缺陥を含蔵して居るのであります。而して此大缺陥が、人智の発達と、人口の増加と交通機関の進歩と生活の競争(コンペティション)とに

よりて、益々急速に強大化して来たのが、今日即ち1933年の世界の不安を生み出したのであるのです。(序11.6—序12.10)

(注1)「モラロジー」および「思惟方法」の意味、分析資料

本論文でいう「モラロジー」とは、下記の「分析資料①②にみられるその学問体系・思想体系」の意味に限定する。

また、本論文でいう「思惟方法」とは、「モラロジーの創建者広池千九郎博士がモラロジーを構築する際採った研究態度・研究目的・問題意識・研究方法(視点・枠組みなど)の形成に対して、意識的・無意識的とを問わず、決定的影響を与えたと考えられる思考のパターン・発想方法」を意味する。

研究の分析資料としては、つぎの二つを使用した。ただし、これらの資料中、著者以外の人の手になるところの引用文の使用は、原則として避けた。

① 広池千九郎〈1928〉1968、新科学としてのモラロヂーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論文. 道徳科学研究所

② 広池千英〈1969〉1974、道徳科学(モラロジー)および最高道徳の概要. 広池学園事業部

(注2)

物質万能主義、感情主義、迎合主義、力万能主義、形式主義、政策主義、眩惑主義、便宜主義、無差別平等主義、放縦主義、刹那主義、闘争主義、分裂主義、急進主義、破壊主義、狂信独善主義、忘恩主義、無神主義、反道徳主義(3)

(注3) 使用記号の説明

① 独自の概念であることを強調する場合、それを「　」で囲んだ。

② 極大の付点(・・・・・・・・・・・・)はすべて筆者による。

③ (注1)に示した分析資料①にある「モラロヂー」の表記はそのままとし、あとすべて「モラロジー」として表記した。

④ 引用資料右肩のゴジック数字は、本論文において便宜的につけた引用資料番号である。また文中の(　)内の数字は出典をしめす。cf. 巻末の出典注 -1, -2。

1.2 問題克服のための基本方針——モラロジー建設の基本目的と研究目標

以上のごとき問題構造の把握に基づいて広池千九郎博士がたてた問題克服のための基本方針は、つぎのごとくである。(4)

① 聖人の教えを中心とした新科学を「最初の試み」としても早急に建設する。

② これに基づいた自律的・組織的な新しい教育活動の基礎を築き、展開する。

③ ①②により、現代思想を根本的に改訂し、世界人心のたて直しをはかり、もって人類の生存・発達・安心・平和・幸福の実現を阻んでいる諸問題を抜本的に解決するための道を切り開く。(**基本目的**)

かくてその大著『新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論文』(1928、道徳科学研究所、全3491頁) 執筆のための**研究の基本目標**を、つぎの二つにしぼった。

① 世界諸聖人の教説・教訓・事蹟に一貫するところの学問・思想・道徳・信仰の原理を、現代諸科学の成果および人類の歴史的・社会的な経験的諸事実をふまえて体系化する。

② 道徳実行の効果を科学的に説明する。(5) 即ち、

02 モラロヂーの最初の著書たる本書第12章に於ては世界四聖人の真精神と真事蹟とを記し、第13章に於ては万世一系の日本国体成立の真原因を述べ、之によりて以てモラロヂーの本質の淵源を明にし、次に第1章より第11章に於て現代の科学的智識を総合し、其一貫せる原理により以て世界諸聖人の教説・教訓及び実行の合理性を説明し、次に第14章及び第15章に於てモラロヂーに関する原理・歴史及び内容等、すべて其本質を開示して大方識者の判断を俟てり。願はくは世界の最高識者深く之を研究・翫味且つ体得され、以て先づ自己を救ひ、次に世界を救うて国家及び人類の幸福を保護せられむ事を。(序96.10—序97.7)

1.3 モラロジーの実学性

以上のごとき「心のたてかえによる現実問題解決」志向という徹底した目的志向性の思惟方法のあとをたどる時、モラロジーの学問的性格の筆頭に、その実学的な基本的特質を指摘しなければならない。(6)

2. 「普遍性と超越」の思惟方法

2.1 モラロジー建設のための研究の基本的態度——「普遍性」志向と「超越」の論理

1.2「問題克服のための基本方針」の項でのべたごとく、モラロジーは世界人心のたて直し(「開発・救済」「更生」)を通して人類永遠の平和樹立のための基礎をひらくことをその建設の基本目的とするところから、必然的に、さまざまな諸対立抗争の渦を超えた立場、全人類を対象とする終始一貫した公平無私・普遍性志向の研究と実践の態度、つまり「普遍性と超越」の思惟方法と態度を基本的な特質として形成する。(cf. 3.「調和とバランスの思惟方法」)即ち、このことは以下の文章よくに示されている。

03 今茲に私の発表せむとする所の『道徳科学の論文』は即ち新科学「モラロヂー」の最初の著述であります。而して其実質は純然たる一つの科学的研究の結果にして、全く内外何れの宗教及び宗教団体にも関係なく、且つ或る階級・或る民族若くは或る国家に偏する事なく、極めて公平にして且つ純粋に科学としての性質を具有するものであります。(序101.4—.8)

04 今此モラロヂーは、第1、其研究法が科学的であり、第2、其内容が最高道徳であり、第3、其普及の方法が教育的であります。斯くて自ら一面、国家と協調し、他面、人類に対して普遍的性質を有して居るのであります。之が為に如何なる団体が之を採用するも、其団員の全部を安心且つ幸福に導く事が出来るのであります。されば、今日に於ける世界人類の道徳的思想を向上せしめて之を善導し、且つ其各箇人に安心立命を与ふる点に於て、多大の貢献を為し得る可能性を有するのであります。(序102.2—.8)

05　抑々従来の世界に於ては、学問・道徳若くは信仰を以て、各其専門家が各自の立場の利害関係の上から人類を指導して居る為に、人類幸福享受の真の標準と云ふものが定つて居らぬのです。これが為に、一般人類をして普遍的に真の幸福を享受せしめ得ざるやうな状態に為つて居るのであります。然るに今回のモラロヂーは自然の法則の根本原理幷にあらゆる人間社会に於ける経験・歴史・学問・智識・道徳及び信仰を調和し、以て其根柢に存する人類の生存・発達及び幸福の原理と為るべきものを見出し、学問・思想・道徳及び信仰に対して、精確なる標準を開示するものであります。従つて其人類の幸福享受の方法に対する価値は、従来の道徳・宗教の如く偏狭でなく、普遍的で且つ確実であります。(2054.14—2055.8)

06　最高道徳は自己・相手方及び第三者の何れにも幸福を与ふるを目的とす(2856.2—.3)

そしてこの思惟方法は、「人間本性の普遍性」という論理的前提と、「利己性の否定による進化」の論理とに立脚して展開される。(cf. 4.「道徳による進化」の思惟方法)　即ち、

07　モラロヂーにて所謂正統は時代によりて変遷し若くは場処によりて変化するものにあらず。
宇宙間一切の物質及び人事は、皆時代と場処とによりて変質し若くは変遷するのであります。乍併、人類の発達及び幸福に関する根本原理に至つては、時の古今、地の東西を論ぜず、終始一貫して渝(カハ)る異なる意所が無いのであります。即ち人間の本能は人類発達の根本原理の淵源であるのですが、此本能は二つに分るるのであります。其一は自己保存の本能即ち利己的本能であつて、其二は道徳的本能即ち自己犠牲の本能であります。　斯くて、最初には単に利己的本能にのみ依拠して居つたのでありますが、人間の実生活上の経験と諸聖人の教訓とによりて、自己利益の本能のみに依拠するよりは、自己犠牲の本能を之に加へて其生活を営む事が、其箇人若くは団体の発達に大なる利益ある事が認めらるるに至つたのであります。第6章・第7章・第8章・第12章及び第13章参照
斯くの如くにして、人類の発達及び幸福の根本原理は道徳の実行に在る事が

明に為つたのであります。モラロヂーにて所謂正統は、人類の実際生活に於て神の意思に従ひ、純道徳的に其精神と行為とを活動せしむる事であります。是れ実に人類の生存・発達及び幸福の根本原理でありますので、其根本原理自体は如何なる時代にも変遷する事なく、且つ如何なる場処若くは場合に於ても変化する事なき自然の大法則であります。乍併、今日吾人の実生活に関する方法の如きは、其時代・場処及び場合によりて其適用を異にすべきものなるが故に、此根本原理に対しては枝葉に属するのであります。故に此人間実生活の方法は時代によりて変遷し、場処と場合とによりて千変万化の状を呈するのは当然であります。然るに異端に陥る人々は、此自然の大法則を知らずして、本末を誤り、自己幷に一般人類の発達及び幸福に関する根本原理を棄てて、浅薄卑近なる自由・平等及び博愛説に基く所の一時の利己主義に傾倒するものであつて、支那の学者の所謂「浅人(カシガニノアリキヒト)」に属するのであります。全世界に於ける識者諸君、深く此旨を了解せらむ事を乞う。(2546.8—2548.5)

2.2　「普遍性と超越」の思惟方法のよって来たる根元

このように、「普遍性と超越」の思惟方法のよって来たる根元には、自然法の正義の観念[7]および聖人の歴史と場所とを超えて生き続けている普遍的な人類愛[8]があり、これらのさらに根元には、人格的にして且つ有機体的な汎神論的ともいうべき宇宙の本体(神)に対する道徳的な信仰[9]がある。(cf. 3.「調和とバランス」の思惟方法)

2.3　「心のたてかえによる現実問題解決」および「普遍性と超越」の思惟方法をささえ展開するもの

「心のたてかえによる現実問題解決」および「普遍性と超越」という二つの思惟方法をささえ、さらにこれを展開するものには、第1に、自然科学の研究成果のもつ実証性・合理性・公共性・普遍性に対する信頼[10](cf. 広池千九郎〈1938〉1960)があり、第2に、特定聖人ではなく世界諸聖人の学問・思想・道徳・信仰に一貫する原理の把握があり、さらに第3に、これら二つ

と人類の歴史的・社会的な諸経験的事実とを広池千九郎博士自身の深い求道体験において比較綜合し体系化する研究の基本的な方法的態度がある(11)。そしてさらにこの根底に「汎神論的真理観」ともいうべき壮大な真理観が横たわっている。(cf. 3.3)——これが次章以降に順次にのべる 3.「調和とバランス」、4.「道徳による進化」、5.「システム的」の、**方法論上の諸思惟方法**となって展開する。

「汎神論的真理観」(cf. 2. 2)

08 凡そ宇宙の真理 (Truth) 若くは原理 (Principle) を説明する方法は四つあるのです。

第1は天啓 (Revelation) でありまして、是れは宗教にて神とか仏とか申して居る所の宇宙の本体 (Reality) が、人間の中にて最高慈悲心を有する或る人の心と一致した場合に、其人に向つて人類を救済し進歩さする法則を命令的に啓示するものであります。是れは古来極めて稀に起るものにて偽物が多いのです。而してインスピレーション (Inspiration) とも亦異なるのであります。インスピレーションは何人にも起り得る一時の感情的興奮から出づるものであれど、天啓は真に自然に慈悲心の湧き出づる人にのみ起る現象で、宇宙間に於ける極めて貴重なる神秘的事実であります。

第2は聖人・偉人又は宗教の祖師などの教訓であります。

第3は一般多数人の古くより今日までの経験の結果であります。今日の衣食住を得る方法や疾病を治療する方法などを始めとして、すべての物質的及び精神的生活の方法には、多数人の幾多の経験が集まって出来たものが沢山あります。

第4は即ち哲学 (Philosophy) 及び科学 (Science) の研究であります。是れは宇宙の真理若くは宇宙の現象を各専門の学者が分業して、或る一方面から一部分づつ之を秩序的に系統を立てて研究せしものであって、単純な古来の教訓や一般人の経験より一層確実なものであります。

そこで、以上四つのものの説明する結果は、皆必ず一致する筈であるのです。若しそれに一致せぬ所ありとすれば、其内の何れかに偽りがあるか、誤りがあるかであります。たとえへば天啓という事でも、それが真の天啓でなくて、投機師が世人を欺く為に偽作した天啓ならば、それは完全な科学には合はぬのです。又科学と申しても研究不備の場合には、真の天啓には合せず、又真の天啓を説明する事は出来ぬのです。即ちすべて真実なものであり完全なものであるならば、以上四者は必ず相一致する筈であります。そこで宗教の教訓も哲学・科学の原理も、各々宇宙の真理の一部分の現はれたものであると云ふ事を知らねばならぬのです。只、右四者が真理を説明する方法に於て異つて居る事は前に説明してある通りです。(61.4—63.2)

3. 「調和とバランス」の思惟方法

3.1 「調和とバランンス」の思惟方法の輪郭

モラロジーの全思想体系・全学問体系に一貫し、その最も根元的で最も重要な、方法論上の統合の視点ないし態度を形成しているのが「**動的調和**」ともいうべき「調和とバランス」の思惟方法であると考えられる。

例えば、モラロジーにおける学問や教育の組織原理の前提をなす中心的な考え方の中に、また宇宙や人類社会の組織原理と考えられているものの中心に、さらには、諸聖人(特に孔子と釈迦)の教説と事蹟の核心にかかわるものの中に、「動的調和」ともいうべき「調和とバランス」の思惟方法を見出すことができる。即ち、

学問や教育の組織原理の前提

09 凡そ学問の目的は人類永遠の幸福を図る事と、或る瞬間に於ける事物の完成若くは統一を図る事との両者の調和によりて達成せられるるものでありますのです。(2552.3—.5)

10 抑々従来の世界に於ては学問・道徳若くは信仰を以て、各其専門家が各自の立場の利害関係の上から人類を指導して居る為に、人類幸福享受の真の標準と云ふものが定つて居らぬのです。これが為に、一般人類をして普遍的に真の幸福を享受せしめ得ざるやうな状態に為つて居るのであります。然るに今回のモラロジーは自然の法則の根本原理丼にあらゆる人間社会に於ける経験・歴史・学問・智識・道徳及び信仰を調和し、以て其根柢に存する人類の

生存・発達及び幸福の原理と為るべきものを見出し、学問・思想・道徳及び信仰に対して、精確なる標準を開示するものであります。従つて其人類の幸福享受の方法に対する価値は、従来の道徳・宗教の如く偏狭でなく、普遍的で且つ確実であります。（2054.14—2055.8）

11 大小権自他兼行

仏教には大乗・小乗・権教（一時的なる仮りの教へ）・実教（永久的なる真実の教へ）・自力門・聖道門・浄土門・難行門・易行門等区別あり、而して其中に更に沢山の主義があるのです。（第12章釈迦の条参照）

今、最高道徳は以上の如き異りたる主義を皆円満に調和して之を行ふのであります。即ち聖人の真の伝統を継承して居るのは皆斯くあるべきであります。然るに支那に於ても、印度に於ても、欧州に於ても、聖人没して然る後に聖人の末流岐れて多くの主義を生じ、之に外部の異端を合して所謂諸子百家を生じたのであります。是に於て、道徳及び信仰に幾多の主義若くは教派を生じ以て今日に及んで居るのであります。今、此最高道徳は世界諸聖人の正法に一貫する所の道徳の最高原理にして、人類発達の原理を標準と為し、人間生活の指針を示すものであります。されば、是れは純粋正統の学問であり且つ道徳でありますから、すべての主義を包含して居るのです。（第1巻第14章第10項参照）但し最高道徳の実行は、他力を基礎とする事、第14章第31項第3節を参照すべし。（3293.7—3294.6）

12 従来の道徳ではある一つの徳を奨励したのでありますが、最高道徳にては、すべての事を含蓄せる所の円満にして且つあらゆる徳を調和した人間を造るを目的とするのであります。（3269.8—.10）

宇宙や人類社会の組織原理

13 さて「天地の公道」即ち「人間としては何人も行はねばならぬ所の道」と申すのは、此宇宙の組織されて居る原理を指すので、其原理と申すは、万物相互に助け合ふ事即ち相互扶助の原理（principle of mutual aid）により、万有が階級的に若くは平等的に調和し（Harmonize）、以て此宇宙が組織されて居る事であるのです。而して此調和（Harmony）と云ふ詞の中に

は、比例的平均（proportionate equilibrium）（各個人若くは各団体の実力若くはヴァーチュー即ち徳の質と量とに比例して権利若くは利益を賦与する事を云ふのである。彼の差別的平等と云う語は甲と乙とを階級的に取扱ふと云ふのみにて明確を缺く恐れあり）平均法（levelling and democratic law）若くは因果律（Causation）と云ふ事を含んで居るのであります。そこで一例を挙ぐれば、たとえば、動、植、鑛物相互に交換作用を発揮して、或は階級的に、或は平等的に、相倚り相助けて存在し、動物の仲間は又その仲間が相互に交換作用によりて、或は階級的に、或は平等的に相倚り相助けて生存して居る事であるのです。但し、此外に、大宇宙の存在若くは大小諸団体の存在の必要の為に、「呑噬作用」若くは「殺レ小救レ大作用」も行はるるのであります。（序2.7—序3.9）

14 社会の本質は、既に述べたやうに、結局、道徳的と謂ふべきであります。社会は初め人類の本能によつて創始せられたるものであれど、其後、智識及び道徳の発達に伴ひ、構成の原理を道徳に置くことと為り、遂に以て今日に及んだのであります。而して一方、人類の文明も亦人類の本能に其源を発し、遂に智識及び道徳の発達によつて、漸次に幾多の変遷を経て、今日のカルチュア（Culture 文化）の端を啓くに及んだものであります。

されば、社会の本質も文明の実質も、共に同一の基礎に立つものであるのです。従つて人類の幸福なるものは、社会の発達及び其内部の調和、文化の発達及び其内部の調和、及び其両者間の調和宜しきを得たる点に於て得らるるのは当然であります。而して其所謂調和は道徳に依らざれば得べからざるものにて、如何に社会即ち団体が栄えて、其団体の力が強く為つて居つても、其基礎が単に人類の本能若くは智識に偏つて居らば、早晩、其団体は崩壊するの外はないのです。古今の歴史上に、強国若くは大国の敗頽せし事実の如きは、正に其好適例を提供するものであります。文明亦然りであります。如何に学問的・智識的若くは物質的に偉大なる発達が完成されても、道徳的分子の缺乏せる文明及び文化は、早晩、崩壊を免れませぬ。20世紀の欧州文明の危機に瀕せるは即ち此消息を物語るものであります。（970.10—971.12）

15 尊ニ一重箇性ヲ不レ軽ンセ団体ヲ

従来、箇人主義は、彼の国家主義若くは一般に団体に重きを置く所の主義に

対峙して居つて、常に相争うて居るのであります。然るに今、最高道徳は団体成立の歴史によりて団体の発達を希望するのであります。且つ最高道徳は神の意思を体得して人間の個性の幸福を尊重するであります。斯くてあらゆる場合に其両者の調和を目的として進むのであります。（3274.8—.15）

16 されば、たとひ学問・知識・勇気・忍耐及び富の力を有するも、特に利己心の強き人は真の調和力を有せざるが故に、利益の為には一時他人と協力して共同動作を為す事あるも、皆久しからずして分裂するに至るのであります。故に或る民族若くは人種にして斯かる利己心の強きものあらば、其民族若くは人種は国家の如き永久的団体を形成する事は出来ぬのであります。即ち今日現存する所の或る一、二の民族の如きは、人間としてはあらゆる素質に卓越して居れど、利己心甚だ強きが故に、自ら国家形成し若くは之を永久に維持する事が出来ぬのであります。此他現代に於ける或る主義者の如き、之と同じく全く利己心に因りて集つて居るのでありますから、其主義に対する信仰の力は極めて強けれど、比較的永久に其或る一団体を維持し且つ発展さする事は出来ずして、或る程度まで進めば内訌を生じて分裂するに至るのであります。（3033.12—3034.9）

諸聖人の教説と事蹟の核心にかかわるもの

17 さて、此『中庸』の教説は即ち支那聖人の最高道徳の実質でありますので、神の慈悲若くは至誠の心・伝統の尊重・人心の開発若くは救済等の原理、皆此中に含まれて居るのであります。故に公平及び調和の性質を有する事は勿論、普通人間社会に於ける形式的中庸の意味を超越して居るのであります。即ち釈迦の所謂中道の意味と全く同一であります。（第12章釈迦の条参照）故に、たとひ道徳を行ふにも、聖人の教説の或る一部分を採択し若くは自ら或る主義を樹つる如きは異端であります。（2561.11—2562.3）

18 想ふに、釈迦の実行と其実行の結果たる教説との偉大なる点は、釈迦が世俗の快楽の放逸を疑ふと同時に、バラモン的苦行が人類救済上価値の乏しき事を看破して、両極端の何れにも偏せざる所の最高道徳を発見且つ之を実行す

るに至つた事であります。而して此最高道徳は即ち釈迦の所謂中道であつて、其中道は単に事物の中心・調和・統一等を意味する如き単純なる思想に止まらずして、正に人間の本能より発達せる所の貪・瞋・痴の三毒を超越せる精神作用及び行為であると云ふのであります。（1795.7—.13）

なお、「バランス」の思惟方法は、本来、「調和」の思惟方法の中に含まれるべきものであるが、ここではそれが「平均法」（「自然法」「宇宙的正義」）「因果律」「義務先行」「進化」等々、モラロジーの科学性にかかわる極めて重要な基本概念の根底をなす思惟方法として、「調和」の思惟方法の中のより動態的な側面を強調するため、特に取り出し「調和とバランス」と併記して表現した。

19 支那にても『中庸』第20章には「誠天之道也、誠之者人之道也」と云ひ、次第26章に「至誠無息、不息則久、久則徵（徵とは至誠を歌めば其好結果必ず外に顕はるることを云ふ）（中略）天地之道博也、厚也、高也、明也、悠也、久也（下略）」とありまして、自然法と誠とは同一にして、永久性を有し、之を累積すれば幸福に到る事を示して居ります。次に『易』繫辭上伝には「天下之理得而成二位乎其中一矣」とあり、『中庸』第1章には「致二中和一天地位レ焉万物育レ焉」とあり、次第2章に「孔子曰、君子中庸、小人反二中庸一」とあり。これは天地の原理と中・中和及び中庸と同一にして万物は之に因りて成育するものと為し、君子と小人との区別は此原理を守ると守らざるとに在る事を示してあります。次に『尚書』呂刑篇には裁判の方法を記して「明啓二刑書一、胥占咸庶二中正一」とあり。これは中庸と正義と同一にして、人間の幸福上最も重大の関係ある裁判は中庸と正義とによる事を示したものであります。さすれば、聖人の教へに於ては自然法は神の心の表現にして、其本質は正義であり若くは中庸であつて、万物の成育及び人間幸福の本であると云ふのであります。而して支那にては、神（本体）の作用を天道・神道若くは天理と称し、其天道・神道若くは天理なるものは、中庸若くは正義の本質を有するが故に、すべての事柄に於て平均（Average）・均衡（Balance）・公平（Impartiality）・道

理（Reason）若くは平等（Equality）を要求するものと為つて居ります。そこで此天道・神道若くは天理は平均法（Democratic Law）の支配者であると云ふのであります。以上支那の事は第8章の平均法の条、自然淘汰の条、并に第12章の孔子の条の内、天・天道云々の条及び中庸・正義云々の条を参照して御研究を乞ふ 又西洋にては、自然法に関する哲学者・倫理学者及び法律学者の解釈は多種多様でありますが、之を一言に要約すれば、自然法とは神の法則であつて、其実質を成すものは正義であつて、結局、前記の中庸・平均・平等などであると申すのであります。（2091.6—2092.12）

モラロジーにおける「調和とバランス」の思惟方法において特に注意しなければならない点は、利己性の否定の論理を媒介として成り立つところの、精神的な次元の高まり、超越の契機性を内包している点である。この点が、単なる形式的一時的な、普通道徳における「調和とバランス」の思惟方法との根本的な相違点である。（cf. 前掲引用資料(17)、(18)および2.「普遍性と超越」の思惟方法）

3.2 「調和とバランス」の思惟方法の論理

「調和」「バランス」の如き直観的な概念が明確な論理を果してもつといえるものなのか、という根本的な難しい問題がある。しかしここでは、あるとすればどのような論理を仮説として考えることができるか、という立場に立って考察したい。

モラロジーにおける「調和」の思惟方法の論理には、AもBも元来一つのものであるとみる「一体」の論理、および、AかBの一方を切り捨てることを避け、そのいづれかを中心としながらも共に相手を前提とし肯定する「両是・循環」の論理が考えられる。

「一体」の論理が全体性から部分性を導出するのに対し、「両是・循環」の論理は、物事の本末軽重を明示しつつ部分性から全体性を導出する、いわば概念システムにおける方向性の違いを観取することが出来るが、共に非常に素朴で有機体的な色彩を感じさせる論理である。一括して、「両是一体・循

環」もしくは「一体両是・循環」の論理とよぶことも可能であると考える。

「一体」の論理は、モラロジーの根幹をなすともいうべき知徳一体論に最も典型的に現われている。この他、宇宙の循環律的一体性、宇宙（神）と人間の精神的一体化の可能性(12)、汎神論的真理観ともいうべき真理の相補性と合一一体性(13)、社会の有機的一体性と一心同体社会形成の可能性(14)、心身の有機的一体性(15)、人格における知情意の一体性(16)、知と徳、正義と慈悲の合一一体性、(17)学問と実践、モラロジーと最高道徳の合一一体性(18)、開発と救済の究極的一体性(19)、品性完成（己利）と最高道徳実行（利他）の一体性(20)、最高道徳の中心的な六大原理間の有機的・循環的な一体的関係(21)、「三方よし」的一体性ともいうべき最高価値観(22)等々に見られる。

知徳一体論

20 前章に於て、人間の精神作用の偉大な事を説明しましたが、此精神作用（Mental Act）の内容は、之を智的方面（intellectual side）と、道徳的方面（moral side）とに分ち得らるるのであります。即ち精神は智的と道徳的と云ふ二つの形式に分れて働くのです。乍併、両者の実質（Essence）は一つであるので、実は其働く形式を一方面から見て智とか道徳とか名付けたものであります。故に真の智識と真の道徳とは一体両面の名称に過ぎぬものです。（471.3—.8）

21 上述の如くに聖人の教訓も、今日の科学的研究の結果も、皆共に真の智識は真の道徳に一致すべきものであることを認めて居り、真の智識は必ず道徳を含み、真の道徳は必ず智識の基礎の上に立つものであることを明にして居ります。勿論学問上の真理に関する智識は、常に聖人の教訓と矛盾すべき筈のものではないのであります。
然るに通常の解釈に従へば、智識と道徳とは別々のもので相違があるのです。即ち智識は種々の意義に於ける自己の保存及び発達を図る性質を有するものであって、道徳は他を愛する性質を有するものと考へられて居ります。そこで普通人間の智識と云ふものは、道徳を含まぬのであります。故に只智

識ある人と、道徳心があつて道徳を行ふ人とは、通常全く異つて居るのです。されば今日に於ては道徳心を有せずして反つて巧みに智識を応用し、只政策的に道徳的言行を為して社会に立つ人が多いのであります。これは智的道徳若くは政策的道徳と申しまして不完全な道徳の一つであります。第10章参照
次に道徳心はあつても智識無きものは社会の事情若くは時勢を洞察し得ない為に、其道徳心を発現する方法を誤り、結局自己・他人及び一般社会の幸福を破るに至るのであります。且つ智識無き人の道徳心及び道徳行為は、何等か外部の刺戟に遭へば忽ちに悪化し易いのであります。低級なる信仰団体の腐敗堕落の原因は主として茲に在るのです。是れ現在に於ても将来に於ても、教育上及び宗教上注意をせねばならぬ重大事と考へます。(500.1—501.7)

有中心型「両是」の論理は、モラロジーの基本的発想法の精髄・結晶ともいうべき最高道徳の格言に最も数多く、最もはっきりと現われている。例えば、

22 尊一重(スレドモ)人間ヲ不レ軽ニ物質ヲ (3273.1)

23 先造リニ精神ヲ次造ルニ形式ヲ (3245.2)

24 されば最高道徳の原則としては、最高道徳を体得したと云ふ時には、第1に、従来の因襲的道徳実行の動機・目的及び方法の根本を最高道徳的に変ずること、第2に、因襲的道徳の形式を成るべく完全に実現して、其上に漸次に最高道徳の精神を加へ、更に之を美化して表現することであります。凡そ此二箇条の実行は最高道徳実行の要諦(カナメナミチ)であるので、此二箇条を実行することによりて、我々人間は始めて完全に近いものに為るのであります。(2061.3—.8)

25 尊ビレ質ヲ次トシレ量ヲ積ミレ労ヲ大ス成
農・工業の製産品に於ては、其質は不良であつても、大量を要するものがありますが、団体の成員は小数にても質の良いのを尊びます。それ故に、第1

に、自分が量的の人間でなく質的の人間に為らなければなりませぬ。即ち必ずしも多才多芸の人と為るを要せず、奮闘的人物と為るを要せず、正統の学問・智識・芸術若くは信仰に秀いで、且つ最高道徳の基礎の上に立ち、
諄々(スナホニアタタカキ心ヲモチテ)として正しく之を活用する人と為る事を要するのであります。第1巻第14章第31項参照 (3318.11—3319.4)

上の他に、つぎのような例に有中心型「両是・循環」の論理が見られる。即ち、絶対性と相対性の関係[23]、全体(秩序)と個性(自由)との関係[24]、精神と物質、道徳と経済の関係、品性と肉体・生命その他人間的諸力との関係[25]、精神と形式・行為との関係[26]、質と量の関係[27]等々において……。

以上要するに、「調和」の思惟方法の論理とは「動的調和の論理」ともいうべきものであり、これを一言にして表現すれば、概念(主義・思想・信仰上の立場)の一方の極のみに立つことを否定し(「両否」)、他方の極の立場をもふまえ(「両是」)両者を循環律的に一体のものとして統合するいわば「**否定を媒介とした有中心型両是一体・循環の論理**」あるいは簡単に「**両否両是一体の論理**」として特色づけることができる。[28]

「バランス」の思惟方法の論理は、一方の極Aに何らかの作用が加われば、それに見合った何らかの変化がおそかれ早かれ必ず他方の極Bに現われるとする論理に他ならない。これは、自然法の哲学および中庸の哲学の核心たる宇宙的正義、因果律、平均法等の概念の論理的根底をなすものとしてとらえられている。(cf. 前掲引用資料 13、19)

この他に、これはつぎの如き例に見られる。平均法[29]、特に積善・積不善の累積とその結果即ち因果律[30]、進歩と道徳実行の程度との関係[31]等々において……。

3.3 「調和とバランス」の思惟方法をささえ、展開するもの

既に1.2および2.3において述べた如く、「調和とバランス」の思惟方法の基礎には、モラロジーのもつ壮大な研究目的と研究目標があり、「現実問題

解決」および「普遍性と超越」志向の論理をささえている「比較総合」の基本的な方法的態度がある。

根元的であるが故に素朴ともいうべき「調和とバランス」の思惟方法をさらに展開し精密化し体系化するもの(注4)に、第5章に述べる「システム的」思惟方法がある。一方、「バランス」の思惟方法は次章「道徳による進化」の思惟方法の根底(前提)をなし、展開する。

(注4)

「調和とバランス」の思惟方法は、一言で表現するとすれば、「AもBも」あるいは「AにつれてBも」式の思惟方法として特徴づけることができる。これと全く対照的な思惟方法に、「AかBか」式の分析的な二者択一的思惟方法および「AとBの対立から高次元のCを」式の弁証法的思惟方法がある。

モラロジーにおける方法論上の統合の(syntagmatic)原理としての「調和とバランス」「道徳による進化」「システム的」の三つの思惟方法の根幹には、これら分析的・二者択一的な(paradigmatic)思惟方法や弁証法的思惟方法は認め難い。しかし、この分析的思惟方法は、一方において上の三思惟方法の部分的な基礎的素材形成にかかわると同時に他方、モラロジーの外に対しては、他の思想体系や学問体系を批判・評価する際の独自の評価規準を形成する。(cf. 注1)また、弁証法的な思惟方法の導入によって自我没却(利己性の否定による次元の高まり・超越)の論理を再構成し、解釈することは、次元の高まりを動態的にとらえるという意味ではモラロジーのすべての分野に理論的明快さと活力および発展性を触発する可能性をもつと考える。

4. 「道徳による進化」の思惟方法

4.1 「道徳」および「進化」の意味

モラロジーにおける「道徳」の意味は、広範囲の内容を含み、はなはだ多義的であるが、大凡つぎの3点にまとめられる。

① 「道徳」とは、犠牲である。

② ただし、単なる犠牲ではなく、相手と自己と第三者(社会)の全部の

利益をはかる「三方よし」の精神作用と行為を、「真の道徳」とみる。

③ つまり、「真の道徳」とは、究極するところ人類の生存・発達・安心・平和・幸福実現に寄与する精神作用と行為をさす。[32]

つぎに、モラロジーにおける「進化」の意味の特徴は、大凡つぎの6点にまとめられる。

① 万有を変化(向上と堕落)の無限の可能態・過程とみること。[33]

② 従って、直線的・必然的な向上の立場(cf. 定向進化説など)および単なる楽観的進歩思想の立場をとるものではないこと。[34]

③ 人間を宇宙・大自然の一部分とみる立場に立つことおよび前述①の立場に立つことから、さらに、人間を宇宙の進化を補翼すべき存在としてとらえていること。[35]

④ 聖人の実行された道徳(最高道徳)により動物的人間から神的人間に変化(「更生[36]」)することを、「真の進化」と考えること。

⑤ (前述③④の点より)従って、いちじるしく実践的な性格をもつこと。

⑥ 以上の考察の結果、一般の進化論・進化学の「進化」の概念とは同一ではない。——モラロジーではこれらの研究成果をふまえながらも、一方、独自の扱い方と展開をなしているといえること。

4.2 「道徳による進化」の思惟方法の論理

人間は単なる生物的存在を超えた精神的・道徳的存在である。従って精神作用(本能・知識・道徳)のうち特に道徳心こそ人類進化の原動力である。道徳心のうちでも最高道徳心こそ、人類進化のきめ手ともいうべきものである。——というのが「道徳による進化」の思惟方法の論理の荒すじである。この論証に、広池千九郎博士は聖人の教えと諸科学の成果のぼう大な資料を駆使しているが、以下にその要点にふれる最少限の箇所のみを提示する。

即ち、

26 専門学者の研究を総合して見るに、人間と他の動物との精神的方面に於ける

顕著なる差異は大凡左の如くであるやうです。即ち人間は

第1．理性を有し、

第2．概念及び言語を有し、

第3．道徳感を有し、

第4．事物の相互関係を認むる場合の特殊なる能力を有し、

第5．慣例を有し、

第6．神を崇拝し、

第7．道具を以て作業を為す。

凡そ此七つの特色は、たとひ文化の低い程度の人種でも、苟も人類と云ふ名の付くものは多少之を有して居るのであります。然るに、人類以外のものはたとひ之を有して居つても其程度甚だ低く、若くは其分量が甚だ少いのであります。殊に神を崇拝する宗教的信念の如きは全く人類の特有にして、動物には其観念が存在せぬのであります。人類と動物との差に関しては追加文の条（554頁）参照を乞ふ　(536.13—537.13)

27 第3章及び第4章に亙りて、人類の先天及び後天に於ける階級の原因を考察致しました結果、人間の階級即ち人間の身体、生活上に現はれたる特徴（Characteristics）及び其運命（Destiny）は環境の勢力と自己の精神作用とより来ることが明白に為りました。そこで更に一歩を進めて其身体上に現はれて居る特徴と其原因とに関する事実、其生活上に現はれて居る特徴と其原因とに関する事実及び其各箇人丼に各種族の運命と其原因とに関する事実を考察して、一層人間の階級の真原因の在るところを明にしたいと思ふのであります。而して人類の文明（Civilization）若くは文化（Culture）の原因は種々あるも、結局、其人間の精神作用に帰著するものでありますから、特に此点に就いても注意を願ひたいので御座ります。(505.5—506.1)

28 さて、今私が茲に発表せむとする所のモラロヂーは最近の科学的研究の結論の基礎に立つて　一方には人間の生物的部分を認め、他の一方には一般の生物に対して優越せる人間の精神作用を認めて、人間の道徳教育に関する必要及び其実行に関するあらゆる方法を説明し、且つ現在及び将来の人間が古聖人の実行せる最高道徳を体得且つ実行し得る可能性ある事と其実行の効果

とを、歴史的及び科学的に明にせむとするものであります。(54.4—.9)

29 生物が生存競争を為すに当つて自然の法則に適応する場合には、即ちそれが自然淘汰の結果として最適者と為るのであつて、生存を全うする事が出来るのであります。然るに人間に至つては、其生存本能の外に他の生物に優る所の智識及び道徳を有するが故に、意識的に自然の法則に適応する事が出来るのであります。特に人間には人為淘汰と云ふ法則が発見されて居ります。(988.11—989.2)

30 社会学に於ける社会構成の原理に於ては、人間の本能・智識並に道徳心の三つの作用に在れど、其究極は人間の道徳心の作用に在りと為つて居るので、是れは実に科学的にして合理的なる研究の結論であります。即ち現実社会の構成が人間の道徳心即ち犠牲若くは奉仕の観念から起つて居る事は、人間の原始時代即ち孤立時代に於ける男女の肉体関係が精神的関係を生じて、それが秩序ある夫婦関係に進み、遂に家族（ファミリー）（Family）の連合、部落（Village）の結集、国家（ステート）の完成にまで及んだ事実が、之を証明して居るのである。而して此社会構成の事実が即ち所謂天地自然（ナチュラル・ロー）の法則及び天地の公道（パブリック・ロード）の現はれであるので、人間進化の真の方法であるのです。然る時には天地自然の法則とか天地の公道とか云うものの本質は自（オノヅカ）ら此処より説明さるるのであります。(976.7—977.5)

31 世界の平和と人類の幸福とを得むには、道徳の普及を図るより外に途なき事は既に明に為つたのです。併し其所謂道徳が前述の如くに不完全である為に、到底、今日行はれて居る所の因襲的なる普通道徳を以てしては、人類の幸福を今一段増進さする事が出来ぬと云ふ事も亦既に明に為つて来たのであります。而して其目的を達成するに適当なる道徳は、古来、東西諸聖人の実行せられたる所の最高道徳である事が、茲に初めて明に為つたのであります。(1231.3—.8)

32 因襲的道徳実行の結果

以上述べし通り、此因襲的道徳は今日の文明を誘導するには大いに與つて力

ありしものでありますが、併し元来、此因襲的道徳は既述の如く人間の利己心の発現であつて、人間の生存競争の具として採用せられて居るのですから、少しく自己の感情若くは利害に衝突する事あれば、全く其道徳心及び道徳行為は破るるのです。それ故に、個人の心中、常に緊張と興奮とを伴ひますから、真に平和を維持する事は出来ぬのです。且つ偶々其智慮深きものは怒りても之を形に顕はすまいとして努力するのですから、愈々其心を苦しめて、各人、早晩疾病を醸成し且つ却つて不人望を買ふに至る事は免れませぬ。故に、此因襲的道徳は今後世界の文化を大成して人類の平和及び幸福を、より大に且つより安固にする根拠と為り難いのであります。(1229.1—.10)

33 凡そ人類進化の傾向は今日既に他の権力に依頼して幸福を求むる時代は過ぎ去つて居るので、今後に於ては自己の最高品性を造り、其力を以て上は諸伝統に報恩し、下は人心の開発に力を注ぎ、自己の運命及び自己の生活は自己自ら之を開拓し且つ之を発達さするに在るのです。然るに現代人は皆此時代の傾向を知らず、徒らに或は国家の権力に信頼し、或は自己所属団体の権力に依頼し、或は甚しきは自己の親族若くは友人に依頼して其幸福を得むとする如きものの多きは真に憫むべき事であります。元来、人間の安心及び幸福は皆自己の道徳的精神と自己の道徳的努力とに求むる外、之を外部の形式的事物に求むべきものでないのであるのです。(2455.6—.14)

34 斯くて真に神を認め聖人の教説を理解するものは即ち神に救済せられて所謂更生(コンヴァージョン)せるものであるのです。元来、此人間は、天啓にては、神の創造であり且つ神の力によりて進化するものと称せられて居り、科学にては、自然の発生物であつて進化の要素を有するものであると称せられて居るのであります。即ち何れにしても、人間は此宇宙間に於ける自然の産物中、優越せる精神作用を有するものにて、絶えず創造せられ且つ進化するものであるのです。乍併其創造と進化とは如何に物質を以て人間を培養するも其効力は無いのであります。而して其人間に対する創造及び進化は人間の精神に対して人間の過去の経験の結果たる学問及び道徳に加ふるに聖人の教説を注入し、以て之を開発するに在るのです。(序129.1—.10)

4.3 「道徳による進化」の思惟方法の特色

「道徳による進化」の思惟方法の特色は、以上4.1おおよび4.2の考察と資料から、つぎの九つの特色にまとめることができる——①自己革新性(実践性) ②個人性・精神性 ③漸進性・永続性 ④平和性・建設性 ⑤目的(価値)志向性 ⑥普遍性・全体性 ⑦未完性・可能性 ⑧科学性・学問性 ⑨教育性[37]

4.4 「道徳による進化」の思惟方法をささえ、展開するもの

以上にのべたごとく、モラロジー全体を貫ぬく最も顕著な方法論上の第2の基本的特質は、「動物的人間から神的人間へ」という利己性の否定による次元の高まり(「普遍性と超越」)の論理を軸とする「道徳による進化」の思惟方法によつて全体がまとめ上げられている点にある。(cf. 方法論上の第1の基本的特質としての 3.「調和とバランス」の思惟方法) この「道徳による進化」の思惟方法のもつ目的(価値)志向性、教育性、自己革新性(実践性)、個人性、精神性、平和性・建設性などの側面をささえているものは、「心のたてかえによる現実問題の解決」の思惟方法である。また、普遍性・全体性、学問性・科学性などの側面をささえているものは、「普遍性」の思惟方法であり、漸進性・永続性、未完性・可能性など動態論的な根底をささえているものは、「バランス」の思惟方法であるといえる。

「道徳による進化」の思惟方法をより豊富にし理論化し展開するものは、進化論・人類学・社会学・心身医学・生態学などの自然科学を中心とする人間諸科学の成果とそれらのもつ自己革新性(創造性・刷新性)であり、より精密化し体系化して展開する可能性と方向性とを示唆するものは、つぎの章でのべる「システム的」思惟方法である。他方、この「道徳による進化」の思惟方法は、「自己革新による最高価値実現」の思惟方法として、「最高道徳的教育論」の方法論的な基盤を形成する。

5. システム的思惟方法

5.1 「システム」の一般概念

既述のごとく、「調和とバランス」および「道徳による進化」の、この二つの、モラロジー全体を貫ぬく基本的な方法論を形成する思惟方法を、より精密化し、体系化し、より理論化し科学化するための大なる可能性をもった基本的思惟方法として、「システム」哲学の思惟方法がある。しかし残念ながら、広池千九郎博士の残されたモラロジーでは、それは基本的な視点・態度にとどまり、「自覚的な一貫した論理をもった思惟方法」として展開されるに到っていない。従って、本論文では、これを「システム的」思惟方法とよぶことにした。

本章においてはこれを「システム」の一般概念を手がかりにして跡づけてみたい。

「システム」の一般概念を構成する基本要件は、大凡つぎの四つにまとめられる。(38)

① 相互連関性――部分がバラバラではなく相互に連関し、作用を及ぼし合うこと。

② 全体性・統一性――全体が一つの統一体としてまとまりをなしていること（なおこの他に、統一性をもたらす一つの鍵として「目的性」を含ませる場合もある）。

③ 階層構造性――部分と部分との関係が立体的な階層構造をなしていること。

④ 自律的・創造的な動的平衡性――フィードバック（制御機構）のしくみを備えていることに加え、生きた高度のシステムにあっては、自律的・創造的な働き(フィードフォアド)をもつことが必須要件となること。

5.2 「システム的」思惟方法をしめす根拠

「システム」の一般概念を構成する基本要件を手がかりに、資料を分析してみる時、そのいづれをも跡づけることができる。然し、これらの四つの要件は単なる条件ではないことに注意しなければならない。つまり、全体としてそれらの条件が同時に四つとも全部そろっていなければならないところの要件なのである。――分析資料においては、これが充分自覚的に一貫した論理として展開されているとはいいがたく、単なる視点・態度として存在するにとどまっている。「システム的」思惟方法という所以である。その根拠はつぎのごとくである。即ち、

-1.1 万有の相互連関的把握の発想

35 (1)太陽系・地球及び人類の関係 (2)人類相互間の関係

従来、哲学及び宗教に於て、宇宙（日本語の宇宙と云ふ語はギリシア語のコスモス(Κόσμος)、ラテン語のウニヴェルスム (Universum) に当ります）と称せられて居つたものは、科学から云へば、一切の星辰、太陽系統（the Solar System）の全体及び其中に存在する私共の直接の住所たる地球（the Earth）を総称したものに外ならぬやうです。而して此宇宙の内容は之を科学的に観れば、一つの系統を為して森羅万象皆連絡して居るのであります。特に地球上の生物は、啻に其形体の連絡せるのみならず、其生活機能も亦互に連絡して居るのであります。(99.8—100.4)

36 循環律的連絡と絶対的優越性を有するもの無き事

生命の連絡あると同時に一方には一の植物を害する虫あれば、又其虫を食ふ虫あり、更に又其虫を食ふ何物かがあり、順次に斯くの如くにして此天地の間には一物と雖も全勝を占むるもの無く、順次に甲の生命は乙の生命に没却せられ、乙の生命は丙の生命に没却せらるる如くに、循環律(Circular law)を認むる事が出来るが、これも亦一種の生命の連絡に外ならぬのであります。斯くて此世の中には絶対的に優越性を有するものは無いからして、所謂宇宙（コスモス）は其語の意味する如くに事物の調和を保ちつつ、其内容を形造る所の万

有は永久に保存さるるのであります。此原理によりて、人類社会にも絶対的に卓越性を有するものは無いのです。(109.2—.11)

37 宇宙の万有は相互に関連して居るのであります。されば宇宙万有の一部分たる人間は、宇宙のすべてに関連し、且つ人間相互間に於ても亦関連を持って居るのであります。此事は既に第3章の最初に於て述べてある通りであります。それ故に連帯の観念は、自然の法則から起ったもので、自然の法則に当然一致するものであると謂はれて居るのです。(903.9—904.2)

38 最近の科学は斯くの如く宇宙の渾一 (Unity) たる事を事実の上に証明するに至つたのであります。加之、最近の生理学・生物学及び実験心理学の進歩は、動物及び人間の精神作用と肉体との連絡を証明し、又人類学的及び社会学的研究の極致は、人間各箇の精神作用も亦相互に連絡して居つて、人間の道徳的精神及び道徳的行為は、悉く其真相が他人の心に映じて親疎の区別を生じ、之が為に各人の結合若くは分裂、幸福若くは不幸の差別を生ずる事が明に為つて来たのであります。(101.8—.13)

-1.2 「系・系列」の発想

39 最高道徳にて「伝統」と申しますのは、神(本体)及び聖人より直接に其精神を受け継ぎて居るところの一つの系列の総称であります。今之によれば、伝統とは我々人類の肉体的及び精神的生活を創造し、若くは進化せしむる所の純粋正統の系列 (the series of pure orthodoxy) を指すのであります。故に、これは重大なる人間社会の根本的法則であります。斯くて此系列に属する先行者全部は我々人類の生活の根本を成すものでありますから、実に人類に対する大恩恵者であります。されば、最高道徳にて所謂伝統は人類の生活上実に重大なる意味を有して居るものであります。(2302.10—2303.4)

40 是に至つて読者は益々伝統の意味が明に分りましたでしやう。即ち此宇宙及び人類社会を支配する大自然の法則は太初の神(本体)の建設的努力に其端を発し、之を継承する正しき伝統の系列によりて発達し、其結果、此宇宙は日に

新たに開拓せられ、此人類社会は日に幸福に向つて進みつつあるのです。故に公平無私の心を持し、此伝統の先行者の精神を継承して進むものは自ら大宇宙自然の法則に一致するが故に、此地球上の生活に適応して永久に其発達を遂ぐる性質を帯び来るのであります。故に、其人は上に伝統の先行者を戴き、下に伝統の後継者を従へて、其全系列の一員を形造るのでありますから、此地球のあらん限り其人の名誉・利益及び子孫は存在し得るのであります。且つ其人の真精神を継承せる団体あらば、それは真の一心同体の団体であつて、団員の幸福甚だ大きく、且つ其団体も亦永久に伝はるのであります。(2464.9—2465.5)

-1.3 最高道徳の諸原理間の循環的な相互連関性

41 されば、右に述ぶる所の最高道徳の最も重要なる原理と慈悲の原理とは、所謂相即不離の関係を有し、先天的若くは後天的に慈悲心の萌芽あるものは右の最高道徳の最も重要なる原理を理解し且つ実行するに至るべく、次に此原理を理解し、それに立却して此原理を実行する場合には、慈悲心なくては之を完成する事が出来ぬのであります。故に相互の関係は一体にして循環的に実現せらるるのであります。(2127.5—.9)

-2.1 全体的・目的志向的発想 (cf. 2.「普遍性と超越」の思惟方法、4.3「道徳による進化」の思惟方法の特色)

42 期(シテ)永久(ヲ)図(ル)全体之幸(ヲ) 耐久家屋の意味の説明を含む

最高道徳はすべて何事にても一時的に華々(ハナバナ)しき事を許しませぬ。且つ或る階級とか、或る民族とか、一部分的の人を利して他を苦しむる如き事を許しませぬ。或は或る事業の一部分に力を尽して他を顧みぬ如き事をも致しませぬ。何事も永久を期して全体的に発達するやうに計画するのであります。(3285.5—.9)

43 斯くの如く、此両者 個人として品性の高き人と国家主義の人 の行為は共に道徳的なれど、人類の発達及び幸福の原理のすべてに対しては、其一部の実行に過ぎないのであります。それ故に、此両者共に或る場合には人類の発達及び幸福の原理を阻碍す

る結果を生ずるのであります。たとひ道徳的行為と雖も、或る一つの主義・思想若くは信仰に依拠するものは、偏狭の弊を含みて調和の性質を欠くを以て、事物完成の規則に反するものであるのです。然るに聖人の教へは公平にして一切を包含し、其目的は人類の発達及び幸福の実現に在るが故に、すべて能く事物の本末を明にせられて居るのであります。されば　聖人の教へは人類の発達及び幸福に最も重要なる関係を有する所の国家団体の保存・統一及び完成を以て、人類の発達及び幸福の根本原理とせられて居るのであります。第12章及び第13章に於ける諸聖人の亦蹟参照　是を以て今純粋正統の学問に於ては、其箇人としての品性の完成は、同時に国家の保存・統一及び完成に向つて尽力する事を意味するのであります。（2555.3—.14）

-3.1 自然のサブシステムとしての人間把握の発想（cf. 4.1「進化」の意味特徴③）

44 天地剖判して宇宙現出し、森羅万象（ヨロヅノモノ）此間に存在して、所謂宇宙の現象（Phenomenon）を成すに至れるは、偶然にして然る事は出来ないのである。必ずや其原理（プリンシプル）若くは法則（ロー）ありて茲に至れるものである。故に宇宙間に産出して此間に生存する所の我々人間としては、此宇宙自然の法則（law of nature）に従はねばならぬ事は明かであります。（序1.2—.7）

-3.2 社会の階層構造的把握の発想（cf. 4.2「道徳による進化」の思惟方法の論理）

45 現代の傾向は、近世哲学に於ける人類の自由及び平等説を認めて、階級制度の打破に在るやうでござりますが、今私の科学的研究に徴すれば、それは却つて誤りであると考へられます。既に第3章・第4章及び第6章等に引証せる諸科学の原理は明に人類に自然的階級の存在する事を示して居り、且つ国家の階級制度は決して貴族若くは富豪などの自由に造りしものでないことが分つたのであります。第9章上第7項デモクラシーの記事をも参照すべし

乍併、従来の階級制度は不合理なる人間の力を濫用せる結果から成り立つて居るものを含んで居りますから、これは将来打破されましやう。殊に各国の政治家若くは財産家の中には、其成功の原因に不合理の要素を含んで居るも

のの多き事は普く人の知る所でありますから、これは自然的若くは人為的に壊敗する時が来るのであり、既に此類のものは過去に於て悉く皆壊敗して居るのであります。（2766.1—.11）

46 人類が自己の保存及び発達の必要より団体を形成し、其結果其所属団体の保存及び発達が、結局自己の保存及び発達に一致すると云ふ事から、其団体を重んずる事と為り、其結果、箇人は自己を犠牲として其団体の為に貢献することと為つたのです。即ち箇人は団体の意思に適応し、其命令に服従するに至つたのです。而してそれがだんだんに累積されていろいろな慣例（Tradition）が出来、それが更に団体の慣習（Custom）と為つたのです。そこで其団体の慣習が道徳と見做さるるに至つたのであります。それから次に道徳の内にて、特に団体の保存及び発達に必要な事が其団体の法律として現はるるやうに為つたのであります。（819.3—.10）

-3.3 「本末軽重」という立体的な発想

47 人間の力（Powers）と云ふは学力・智力・体力・金力若くは権力等を云ふのであります。此人間の力の結果は素より其人をして種々の成功を為さしむるものであつて、人間の成功及び幸福の成否・大小は此人間の力の質と量とによるものであります。乍併、此人間の力を運用する原動力は人間の道徳心であります。之を譬ふれば、力は舟の如く、道徳は舵の如きものであります。其船如何に良好にして偉大なるも、其舵の用ひ方によりて或は航海を全くし、或は航海を誤るに至るのであります。（3060.6—.11）

48 根本（The Root）と枝葉（The Branches）との区別

人類の精神的及び物質的生活の根本原理は、道徳の実行に在るのです。たとひ如何なる学力・智力・権力・金力・腕力若くは兵力等を有する人にても万一道徳に缺くる所あらば、永久に其運命を維持する事は出来ませぬ。然るに斯かる力（Power & Ability）は至つて少き人にても、其力を全部若くは大部分道徳的に使用して年月を積まば、遂には其人より大なる力を有しながら、之を全部道徳的に使用せざる人を凌駕する事が出来るのであります。是れ古

今東西の歴史・社会学的事実及び予の40余年来の見聞と実験とによりて極めて確実且つ明白に承認し得たる事実であります。此故に道徳の実行は根本的と云ひ得べく、学力・智力其他の人間の諸力は皆第二義的であると云ひ得るのです。乍併、斯かる人間の諸力は之を道徳的に使用する場合には、其力の量多くして質の可なるものほど其効果が顕著なるは云ふまでもないのでありますから、すべて人間は平素斯かる力を涵養して置く事も亦素より最も必要であります。(476.6–477.5)

-3.4 現代社会混迷の原因の構造的把握の発想

(cf. 1.1 広池千九郎博士の取り組んだ「時代の根本問題」)

-4.1 社会的・個人的システムにおけるフィードバック

49 今国家若くは社会も亦人体と同じく一つの大なる有機体である事は前人の既に説く所であります。只、後者に於ては前者に比して其内容多岐に亘り、其組織・機能、複雑多様にして、且つ極めて微妙なる精神的要因を含むが故に、自然の法則の之に及ぼす感応力及び変化力が多少遅緩を免れぬのです。此故に、人体内の不純物の発泡法に対する場合と、箇人の国家若くは社会の法則に対する場合とは、其結果の現はるるの時間に遅速の差ある事は当然であります。然るに、正統の学問・智識・道徳及び信仰は当該有機体の生存及び発達の栄養物であり、異端は当該有機体中の不純物であるのです。故に其不純物は、肉体中の不純物と同じく、其有機体中の或る部分の強弱・健否に由りて一時其勢力を逞しくする事あるも、順調に自然の法則の行はるる場合には、其不純物は遂に其勢力を失うて、其組織外に排除されて滅亡するのであります。正統の学問・思想・道徳及び信仰は、人間の生存若くは発達を阻礙する不純物を征服し、以て箇人・国家及び社会の生存・発達并に幸福を完成せしめようとする事、恰かも肉体の不純物を駆逐する治療法の如きものであります。(2544.2–.14)

50 次に、人間の精神作用がその人の病気、健康、寿命に及ぼす影響も科学的研究によって明らかに証明されるようになりました。それゆえ、われわれの道

徳心、ことに最高道徳心が健康の回復と増進ならびに寿命の延長に及ぼす効果のあることは明白であります。そこでまず、人間の精神作用が身体に及ぼす力の大きいことについて一言しましょう。これは実験心理学や生理学の進歩に伴ってしだいに明らかになったところであります。元来、人間の情緒が身体の外部に現われたものがいわゆる表情であって、その累積の結果が容貌と骨格とを形造り、またその情緒が身体の内部に作用すれば、それが身体の各局部に影響して累積する結果は、一代のうち、あるいは遺伝的に数代を経て、病気その他の障害となって現われ、それがさらに健康の程度や寿命の長短までも決めるようになるのであります。つまり不平、怒り、恨み、驚き、憂い、後悔、苦痛、喜びなどはことごとく身体の各部に影響してそれを刺激するのであります。この刺激は脳と神経系統、心臓と循環器系統、肺臓と呼吸器系統、胃と消化器系統などあらゆるところに及ぶものであります。たとえば、怒りを初めすべての悪い刺激は、たちまちに血量の不平均的集中をひき起こして、脳その他身体各部に障害を起こし、呼吸、消化、ホルモンの分泌などに悪影響を及ぼすのであります。(G175.4–176.3)

5.3 「システム的思惟方法の特色」

以上の考察から、モラロジーにおける「システム的」思惟方法の特色として、つぎの五つの点が考えられる。

① 相互連関的な現象把握の発想が顕著にみられる。(5.2 の -1.1～-1.3) 特に、「本末軽重」の視点を中心にもつ「系・系列」の発想には独自のものがあり、モラロジーの中心概念(「伝統 (Ortholinon)」) 形成の一つの基礎をなす重要な発想となっていること。

② 強力な目的(価値)志向性にささえられて、モラロジーを一つの有機的な学問体系にまとめ上げているばかりでなく、絶えず全体を展望する巨大な視野への発展性をもっていること。(5.2 の -2.1) (cf.「普遍性と超越」の思惟方法、「道徳による進化」の思惟方法)

③ 有機体的階層構造的な現象把握の発想が最も顕著にみられ、これがモ

ラロジーの「システム的」思惟方法の中心をなしていること。（5.2 の -3.1～-3.4）

④ 自律的な動的平衡の発想（cf.「バランス」および「道徳による進化」の思惟方法）は、モラロジーの学問的・思想的全体系、特に「因果律の原理」の中心をなしている。（5.2 の -4.1）しかし一方、人間の創造性の強調が、モラロジーの理論体系全体について見た場合、概して稀薄であるように思われること。(39)

⑤ 従って、以上の「システム的」な諸発想は、未だ統一的な方法論としてのシステム哲学における「システム」概念とその論理を一貫して展開するに到っていないが、充分その可能性をはらんでいると考えられること。

6. む す び

6.1 まとめ——モラロジーの基本的思惟方法およびその論理的全体構造と特質ならびにモラロジーの現代的意義

人類がかかえているさまざまな現実問題（注5）を抜本的に解決して、人類をその破滅のふちから救い出すことが、モラロジーの究極の研究目的である。

（注5）

現在の私たちのおかれた状況からは、大凡つぎのような緊急の現実的基本問題の解決に迫られている。即ち、①人口と資源の問題、②公害とエントロピー増大の問題、③技術社会・マス社会・管理社会における非人間化の問題、④諸格差の増大と自由の問題、⑤諸争いと戦争の問題、⑥（以上すべての問題にかかわるところの）人間精神の退廃（利己主義・虚無主義）の問題

広池千九郎博士が私たちに残された「最初の試みとしてのモラロジー」では、これらの現実諸問題の全部に直接取り組むことよりも、むしろその解決の根本的基礎として、これら諸問題に取り組むべき一人一人の人間の（ある

いは、これら諸問題をそれ自身の内部にかかえている一人一人の人間）の精神の自律的な根本的な立て直し（「更生」）によるところの、全問題の抜本的解決への道を切り開くこと（前記注5⑥の問題）に全力を傾注している。——即ち、『新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論文』その他の著書に見れる研究の開始と、これに基づくモラロジー学校教育・社会教育の開始が、その最初の布石であり、基礎づくりである。

従ってモラロジー建設の研究目的形成にかかわる基本的思惟方法としてまず第1に「現実問題解決」特に「人間精神の立て直し（開発・救済）による現実問題解決」の思惟方法とその実学的特質を指摘することができる。

第2に、全人類の開発・救済をめざす実践的な統合学たろうとすることの必然的結果、その研究態度形成にかかわる基本的思惟方法として、人間の利己性否定の上に立つ「公平無私・普遍性指向」の態度、および「歴史を洞徹した超越的な洞察」の眼（まなこ）——つまり、「普遍性と超越」の思惟方法をもつ。

第3に、この「普遍性と超越」の思惟方法に基づく研究態度によりモラロジーの当面の研究目的たる「自律的な人間更生の具体的な実践方法の探究」を展開する研究方法形成の基本的思惟方法をなすのが、「調和とバランス」の思惟方法であり、「道徳による進化」の思惟方法であり、「システム的」思惟方法である。

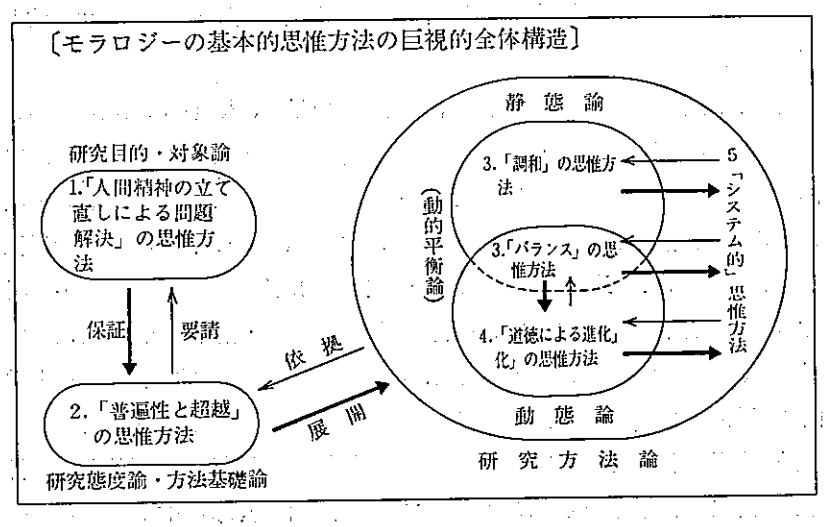
即ち、「普遍性と超越」の保証を、諸科学の成果と、人類の偉大なる教師としての世界諸聖人の教説・教訓・事蹟に一貫するものと、さらに人類の歴史的・社会的な経験的諸事実とを「比較・綜合」することによる体系化の方法に求めた。静態論と動態論の統合論理をなすと共に、一方、「バランスの思惟方法に対しては、「比較綜合」の、より静態論的な側面を形成するのが「調和」の思惟方法であり、これは「一体」の論理・「両是・循環」の論理となって展開し、「バランス」の思惟方法と共に、モラロジーの基本的視点や形而上学的諸概念を形成する。なお、「バランス」の思惟方法は、「比較・総合」のより動態論的な側面を形成し、モラロジーの内容上の重要な、科学的ないし哲学的な中心的諸概念の形成に働く。そしてこれは他方、「道徳による進化」の

思惟方法につながって発展する。「道徳による進化」の思惟方法こそモラロジー教育論の方法論的基盤を形成する基本的な思惟方法であり、動物的人間から真の人間・神的人間へと精神的に生まれかわるための最高道徳的教育論の原理論と実践方法論の基盤を形成している。そして、これら「調和とバランス」の思惟方法および「道徳による進化」の思惟方法を補い、より精密なものに、より体系的なもの、より理論的・実証的なものに発展する可能性をもつものに「システム的」思惟方法がある。

このようにモラロジーの基本的思惟方法の論理的全体構造およびその特質を巨視的にとらえる時、モラロジーは「古くて新しい」永遠の課題ともいうべき「人間精神の更生」の問題を中心にすえ世界平和の実現をめざすいわゆる「自己革新による最高価値実現」の学であることが浮彫されてくる。この点にこそ、まさに、モラロジーの現代的且つ未来的意義――その不滅の意義が存するといわなければならない。

以上にのべたモラロジーの基本的思惟方法およびその論理の巨視的全体構造と特質をまとめて図表にすれば、つぎのようになる。

図表1



図表2

	基本的思惟方法	特質
モラロジーの基本的思惟方法の特質	1.「現実問題解決」	目的志向性　実学性、抜本性、自律性、教育性（開発・救済性）
	2.「普遍性と超越」	基本態度性、普遍性志向性、利害超越性、史的洞察性、総合性
	3.「調和とバランス」	統合性、動的平衡性、両是一体・循環性、比較検証性
	4.「道徳による進化」	動態論的方法性、統合性、教育性(開発・救済性)、自己革新性、個人性・精神性、漸進性・永続性、平和性・建設性、目的（価値）志向性、普遍性・全体性、未完性・可能性、科学性・学問性
	5.「システム的」	相互連関的現象把握性、目的（価値）指向性、統合性、階層構造的現象把握性、有機体性、動的平衡性、弱創造性、発展可能性

6.2 モラロジーの基本的思惟方法解明の意義と今後の課題

学問体系・思想体系としてのモラロジーの基本的思惟方法解明のもつ意義および今後の課題としては、つぎの諸点が考えられる。ただし、今後の課題は（　）内にその旨表示した。

① 本論文においては、学問体系・思想体系としてのモラロジーの理論の全体構造の根（基盤）を形成している「基本的思惟方法」の全体構造およびその特質を、試論的に解明し、それらの巨視的な全体像をクローズアップすることに努め、一応の粗描的な成果を得た。

② 特にその中で、創建者が無意識にもっていたと考えられる「基本的思惟方法」に至るまで鮮明にすることが出来たと考える。――例えば、「調和」の思惟方法のもつ論理としての「一体」・「両是・循環」等の論理の意義と可能性、「調和」と「バランス」ないし「道徳による進化」の思惟方法の関係

にみられる静態性と動態性の統合理論としての「自律的動的平衡性」ともいうべき視点の意義と可能性（後述⑥）、「システム的」思惟方法のもつ意義と可能性（後述⑥、⑦）など。

これらの解明に大きな誤りがないとするならば、さらにつぎのような諸点の意義と課題を考えることができる。即ち、

③　モラロジーの理論的全体構造を規定している前提条件（基本的問題意識、研究戦略構想、研究目的、研究目標、視点・枠組み等の研究方法、研究態度など）のさらに徹底した解明に大きく寄与し得る。

④　また、①～③の結果として、モラロジーの学問的性格が一層鮮明に浮彫されてくる。――目的（価値）志向性、教育性、自己革新性（自律性・実践性）、普遍性（科学性）志向性、超越性、統合学志向性（動的平衡性）、システム性

⑤　（①～④の結果）従来容易に解けなかった理論上の難問・矛盾克服への突破口ないしは手がかり・ヒントを数多く得ることが可能となってくる。――例えば、モラロジーの内容的結論ともいうべき最高道徳論の不変性と科学性志向による変化発展性（クローズドシステムとオープンシステム）の間に見られる自己矛盾は、「動的平衡性」の視点から、また、「両是一体・循環」の論理によって克服できる見通しへの示唆を得る。進化する相対的神[40]と絶対神[41]の論理的矛盾についても同様である。「伝統の原理」の理論的な基礎づけに関しては、個と全の「調和とバランス」の視点によって、モラロジー教育活動の際の世界各国の歴史的・社会的・文化的条件の違いに応じたところの弾力的で豊かな新しい展開の可能性がもたらされる（→今後の課題①）。

⑥　①～④の結果はまた、モラロジーの方法論を巨視的に展望したことにもなり、今後のモラロジーの新しい発展的研究のための方法論的探究への足場を固め得ることになる。――例えば、「調和とバランス」の思惟方法のもつ直観性・演繹性・非精密論理性や「道徳による進化」の思惟方法のもつ論理の荒さ等の弱点を補うものとしての、システム哲学や情報学やレンマの論

理および弁証法論理等の導入による方法論探究の意義と可能性に対する確信を深める。（→今後の課題②）[42]

⑦　また特に、一般システム理論の導入により、最新諸科学の成果の要点を展望し、選択吸収し、モラロジーを学問的に一層豊かなものに発展させるための絶好の位置に立つことが可能となる。――諸科学間の境界を超えて「法則の同形性」を探究するのが、この一般システム理論の主目標であるからである。（→今後の課題③）

⑧　⑤～⑦にのべたごとき今後の課題①～③に取り組むためには、本論文のごとき試論的・粗描的な研究の不十分な諸点をさらに吟味し、堀りさげ、精錬すると共に、モラロジーの基本的な方法諸概念と他の関連諸学問の諸概念との関連を究めることが必要となってくる（→今後の課題④）。さらにまた、広池千九郎博士関係の全資料にわたってその思惟方法の発展の跡づけがなされねばならない。（→今後の課題⑤）　これらのことが相まって、モラロジーの諸学問における真の位置づけとその「破天荒の科学」としてのモラロジーの独自性が確定されるものと考える。（→今後の課題⑥）

⑨　従来モラロジー研究所研究部で主として行われて来たごとき、特定テーマについての分析を武器として研究分野を拡大していく所謂「遠心的・拡散型の研究」に対し、本論文のごとき研究が、統合の方法論を探究し、且つ「遠心的拡散型諸研究」の位置づけと方向づけをなし、さらにそれらの成果を統合していくための「求心的・収斂型の研究」助長への刺激あるいは問題提起の意義をもち、両者相まってモラロジー研究の前進に寄与し得れば幸いと考える。

⑩　本論文では広池博士のモラロジー研究の戦略構想の荒すじをとらえた。今後のモラロジーの学問的前進のために従来加えられた方法論上の最も大きな批判の一つは、それが「個人性・精神性」にとどまり「社会科学的」「政策科学ないしは現実科学的」視点の欠けていると考えられる点にあった。[43] この批判は「最初の試みとしてのモラロジー」についての批判としてはある意味では肯定できるが、本論文1および6.1のまとめでのべたごとく

にモラロジー創建者の「現実問題解決」の思惟方法を跡づける時、その正当な位置づけをすることが可能となるのではないかと考えられる。即ち、「社会科学的」「政策科学的ないしは現実科学的」な研究は、あくまでも「自己革新・更生の学としてのモラロジー」の上に立ったところの発展的研究でなければならない。従って、今後の研究の長期的戦略構想の大すじとしては、モラロジーにおける「救済」の学問的・実践的な基礎研究、モラロジーによる「教育」の学問的・技術的研究、モラロジーに基づく「社会システム改革方法」の学問的・技術的研究の三つの基本的な柱を中心として、具体的な研究長期計画を立てることの必要性を、本論文は示唆する。(→今後の課題⑦)

6·3 おわりに

以上、可能な限りをつくして創建者の発想に同化しつつも、客観的研究態度を保持することに努めて、本稿を展開して来た。しかし、随所に思い切った考察と提言を加えた。従って、思わぬところに誤りのひそんでいることを恐れる。大方のご批判とご教示を切望する次第である。 (1975. 8. 20 記 1976. 9. 21 補訂 1977. 12. 25 再補訂)

出典注

-1. 数字は引用資料の頁数および行数を示す(行数計算には見出しを含めた)。

-2. 分析資料の①と②即ち『道徳科学の論文』と『概要』とを区別するために、分析資料②の頁数の頭にGの記号をつけた。cf, 本論文〇〇頁(注1)

(1) 序12.11—序16.1

(2) 参考分献B群の(5)、4—5、8—9 頁参照

(3) G149.3—.9 G54.8—55.7 G154.2—.8 3255.7—.12 1057.1—.8 G113.4—.7

(4) 序109.2—.5 13.2—.5 序102.2—.8 序126.6—序127.13 序40.5—.12

(5) 序56.1—.4 序112.5—.7

(6) 序109.11—.13 2919.7—2920.1 序119.4—.13

(7) 2111.6—2112.11 2107.13—2108.7

(8) 828.5—.10 1326.9—1329.6 G104.2—109.12 序120.5—.14

(9) 2274.9—.13 2263.9—2264.11 2277.12—2279.5

(10) 参考文献B群の(6) 参照

(11) 序112.5—.7 G3.1—.6 序24.8—序25.2 73.13—74.3 2212.2—.7 2290.6—.13 及び参考文献B群の(5) 参照

(12) 109.2—.14 2290.1—.5 2290.13—2291.5 2105.12—2106.12 1761.1—.5 2103.3—.5 2767.5—.8 3057.8—.10 1980.3—.5

(13) 62.8—63.2 66.4—.9 3316.6—.13 序109.2—.5 2919.7—.12 G3.1—.6 2697.7—.11 2212.3—.9 94.2—.8 序107.1—.5

(14) 101.8—.13 950.11—951.8 2544.2—.14 2464.9—2465.5

(15) G175.4—176.3

(16) 3252.3—.13

(17) 471.3—.8 G2.12—3.6 501.9—502.7 500.2—501.7 ; 3203.2—.12 2155.1—.9 2168.1—.14

(18) G1.3—.4 2931.11—.13 58.11—.14 序109.11—.13 序6.10—序7.6 序43.1—.4 序125.6—.11

(19) G137.5—.9 2614.7—2615.9 79.4—.8 2284.12—2285.3

(20) 2042.8—2043.10 3197.7—.13 2682.8—.11 2657.11—2658.4 序124.3—.13 2722.3—.4

(21) 2127.5—2128.6 2124.2—2125.8 2235.7—.14 2285.6—.11

(22) 1912.9—.12 2161.9—.14 2950.11—2951.1 序117.6—序118.12 ; 2552.3—.5 G149.3—.9 3295.4—12 ; 76.5—.13

(23) 2302.10—.12 G123.7—.9

(24) 2553.1—.12 2555.3—2556.4 879.8—.13 ; 序46.5—序47.1 2491.1—.8 3274.8—.13 3248.11—3249.4 1806.4—1807.7 2421.8—2422.1 2128.1—.4 2320.5—.8

(25) 2284.12—2285.3 2874.11—2875.5 423.9—424.2 1156.2—.8 序130.5—.14 ; 2529.2—.9 G49.13—50.3 ; 3421.2—.12 54.5—.10 ; 3060.6—.11 477.1—.5

(26) 3207.9—3208.14 3295.13—3296.4 3253.13—3254.6

(27) 3225.1—.9 2835.4—.7

(28) 参考文献A群の(14) 参照

(29) 2111.14–2112.11 1006.6–.8 1012.6–1013.4 1731.7–1733.7 2091.6–2092.12 G173.1–174.7

(30) G181.7–.10 G116.10–.13 3041.8–3042.1 3060.12–3061.5 G186.13–187.9 2797.3–.11 3211.3–.12 3178.11–.13

(31) 3237.11–3238.5 3055.12–.14 2210.6–.7 97.1–.10

(32) 2227.4–.10 2856.2–.3 2931.7–.13

(33) 2300.8–2302.7 cf. 2411.1–.13 2106.13–2107.4

(34) 979.4–.9 3171.8–3173.9

(35) 2301.12–2302.3 3206.3–.8 2311.2–2313.6

(36) 2654.9–2655.11

(37) 832.2–.13 3206.9–3207.1 2042.8–2043.14 3197.7–.13 2553.1–.12 3062.6–3063.3 79.4–.8 cf. 54.5–.10 2918.5–.10

(38) 参考文献A群の (1) 参照

(39) cf. 2486.2–2487.11

(40) 2300.6–2302.7

(41) 2269.2–.11

(42) 参考文献A群の (6)、(11)、(12)、(1)、(29)、(30)、(27) 等参照

(43) 参考文献A群の (4)、(5) 参照

7. 参 考 文 献

A 群

(1) ベルタランフィ、L. 1968 長野敬他訳 1972
一般システム理論——その基礎・発展・応用. みすず書房

(2) ボールディング、K. E. 1964 清水幾太郎訳 1967
20世紀の意味——偉大なる転換. 岩波書店

(3) 道徳科学研究所編 1972
『概要』の研究 上・下. 広池学園事業部

(4) 広池千太郎 1953–1954
道徳科学の諸問題（道徳科学研究所編『社会教育資料』 5号 76—82頁、

6号 51—62頁、 9号 80—91頁、10号 26—36頁）

(5) 広池千太郎 1958
道徳科学の問題点（道徳科学研究所編『社会教育資料』23号 29—43頁）

(6) 細川幹夫 1974
モラロジー概論. （注）第12回教育者研究会資料

(7) 市川 浩 1975
精神としての身体. 勁草書房

(8) 黒川 洋 1971
道徳科学（Moralogy）の学問体系の特色——「破天荒の科学」の現代的意味（道徳科学研究所研究部編『道徳科学研究』60号 41—64頁）

(9) 黒川 洋 1974a
人間本性の特質——言語研究の立場からの新しいモラロジー人間学構想のためのメモ（モラジー研究所研究部編『モラロジー研究』2号211—224頁）

(10) 黒川 洋 1974b
モラロジーの「伝統の原理」の現代的意義——試論 （注）1974年度研究部ゼミ用レジメ

(11) 黒川 洋 1975a
モラロジーにおける宇宙の神霊（本体）と伝統の関係——その論理的な構造連関をどうとらえるか？（注）研究部「概要研究会」用レジメ

(12) Kurokawa, H. 1975b
Some fundamemtal ways of thinking in the Moralogy of Dr. Hiroike—An attempt at making clear the logical premise in the Moralogy
（注）ラワリーズ教授を囲むモラロジーの「公開研究会」用発表原稿

(13) 黒川 洋 1976a
モラロジーにおける「調和」の論理 （注)研究部「定例研究会」用レジメ

(14) 黒川 洋 1976b
「伝統の原理」の根底にみられる基本的論理構造の特色——モラジーにおける絶対性と相対性および全体性と個別性の問題を中心にして （注)1976年研究部ゼミ用レジメ

(15) マンフォード、L. 1966 樋口清訳 1971

機械の神話．河出書房新社
(16) 目黒章布 1974
モラロジーの自然観（その１）――広池千九郎博士の場合 （注）1974年度研究部ゼミ用プリント
(17) 宮本忠雄編 1973
現代人の精神構造．至文堂
(18) 水野治太郎 1966
広池博士の科学思想――学問観と方法の特色 （道徳科学研究所研究部編『広池千九郎博士生誕百年記念論文集』355―375頁）
(19) 水野治太郎 1873
モラロジー研究の現状と課題（モラロジー研究所研究部編『モラロジー研究』１号 151―190頁）
(20) 水野治太郎・横山良吉・美和信夫編著 1972
資料が語る広池千九郎先生の歩み（モラロジー研究所研究部編『研究ノート』29号）
(21) 氷非 博 1973
生命論の哲学的基礎．岩波書店
(22) 中村 元 1962
東洋人の思惟方法．春秋社
(23) 中村雄二郎編 1968
（現代人の思想１）病める現代．平凡社
(24) 大河内一男他編 1968
学問のすすめ．筑摩書房
(25) 下程勇吉 1970
宗教的自覚と人間形成．広池学園事業部
(26) 下程勇吉 1973
二宮尊徳の人間学的研究．広池学園事業部
(27) 山内得立 1974
ロゴスとレンマ．岩波書店
(28) ヤスパース、K．1949 重田英世訳 1964

（ヤスパース選集９）歴史の起源と目標．理想社
(29) 吉田民人 1967
情報科学の構想――エヴォルーションストのウィーナー的自然観（吉田民人他編著<今日の社会心理学４>社会的コミュニケーション．1―287頁）培風館
(30) 吉田民人 1972
社会科学における情報論的視座 （北川敏男他編<講座情報社会科学第５巻、情報社会への視座Ⅲ>情報社会科学への道、124―141頁）学習研究社

B 群

（注）この収集は、徹底的なものではないことを予めお断りする。

（１） 広池千九郎 〈1905〉1937
東洋法制史序論．道徳科学研究所 （注）再版
（２） 広池千九郎 〈1915〉1937
伊勢神宮と我国体．道徳科学研究所 （注）再版
（３） 広池千九郎 1915
近世思想近世文明の由来と将来．モラルサイエンス研究所
（４） 広池千九郎 〈1918〉1937
日本憲法淵源論．道徳科学研究所 （注）再版
（５） 広池千九郎 〈1938〉1959
学問上須知要項．道徳科学研究所
（６） 広池千九郎 〈1938〉1960
モラロジー重要教訓集．道徳科学研究所
（７） 広池千九郎 1940
別科卒業記念帳――正篇并に第二篇．道徳科学専攻塾